

三河赤引糸とお糸船の伝統を支えてきた人びと

—新城の養蚕家を訪ねて—

堀田 裕子（愛知学泉大学現代マネジメント学部）※1

松井 美冴希（愛知学泉大学現代マネジメント学部卒業生）

丸地 賢典（愛知学泉大学現代マネジメント学部学部生）

※1 hotta@gakusen.ac.jp

People Who Have Supported the Traditions of “Mikawa-Akahikinoito” and “Oitobune” : Visiting a Sericulturist in Shinshiro

HOTTA Yuko ※2

MATSUI Misaki ※3

MARUCHI Kensuke ※4

※2 Aichi Gakusen University, Prof.

※3 Aichi Gakusen University, Graduate

※4 Aichi Gakusen University, Undergraduate

keywords: Sericulture, Silk, Tradition, Interview, Aichi Pref.

要約

本稿は、愛知県三河地方、とりわけ新城の養蚕を取り巻く歴史と現状を明らかにすべく、2019（平成31）年度「社会調査法演習（質的）」（社会調査士カリキュラムF科目）の受講生2名とともにおこなった調査の報告である。調査においては複数の困難に直面し、最終的には中断を余儀なくされた。だが、「三河赤引糸」および「お糸船」の伝統を継承していくために、その中心人物の活動を記録し周知させることがかれらの抱える喫緊の課題を解決するために必要であると考え、不十分な調査ながら報告することとした。調査のなかで見えてきた、伝統継承者に期待される動機の問題および共同体の「受け手性」理解の問題、そして、「三河赤引糸」と「お糸船」をめぐる団体間の連携の必要性についてもまとめた。

1 はじめに

かつて日本でもさかんにおこなわれ、農家にとっては収入源として、また海外に輸出され国家にとっても重要な産業として機能していた養蚕は、いまやノスタルジーを呼び起こ

す過去のものとなりつつある。現在、群馬県が繭の生産量日本一を誇ることはよく知られている周知の通りであるが、2020（令和2）年度は、養蚕農家の高齢化による規模縮小に加え、猛暑が影響し、生産量は10年前の3分の1以下となったことが伝えられている（『上毛新聞』2021.1.28 電子版）。伝統産業従事者の高齢化は、日本の抱える深刻な社会問題の一つであるといえる。

筆者の居住するここ愛知県でも、かつては養蚕がさかんであった。愛知県は、岐阜県と隣接する尾張地方（図1における尾張北東部地区、尾張中西部・海部地区、名古屋地区、知多地区）と、三河地方（図1における西三河地区と東三河地区）に分けられ、東三河地区は静岡県と隣接している。三河地方は中山間地域が大部分を占めており、その恵まれた環境のなかで育つ蚕の吐く絹糸は、「三河赤引糸（みかわあかひきのいと）」と呼ばれ、ひとつの“ブランド”を確立している。しかし、この伝統を継承する養蚕農家は、金田平重氏が代表を務める豊田市稲武地区（西三河地区）の「いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）」と、海



図1 愛知県の各地区と三河赤引糸関連施設の位置¹⁾



図2 新城の海野氏（写真左）と稲武の金田氏（写真右上）が、伊勢神宮への献糸の伝統を継承していることを紹介する『中日新聞』の記事²⁾

野久榮氏が代表を務める新城市（東三河地区）の「出沢やままゆ養蚕所」の二軒だけとなっている（図2）。そして、本稿執筆現在、海野氏はすでに他界され、その遺志を地元の有志が引き継いでいる。

日本の伝統継承の問題は、結局のところ、若い世代が興味関心をもってもそれでは“食べていけない”点に最大の原因がある。とりわけ養蚕は、米や野菜をつくるのとは異なる一定の手間がかかる。掃立（孵化した蚕に初めて餌を与える儀式）から繭になるまでのおよそ1か月の間は、ほぼ付き切りで世話をしなくてはならない。蚕は大変デリケートな生き物であり、温度・湿度管理、衛生管理、餌やり（蚕は自分で餌のところに行くことができないため人間が餌を蚕のところにもっていかなければならない）など、人間がつねに気を配ってやらなければならないのである。また、農作物と異なり蚕や繭は“自家消費”が難しい。繭から糸を取りそれをさらに一定の太さに撚って、それから布地を織り、さらにそれを加工して衣料品を制作する……となると、かかる手間は計り知れない。また、かつては蜂の子やいなごと同様に、蚕は山林地域の貴重なたんぱく源でもあったそうだが、現在ではせいぜい“珍味”として食される程度である。

今後、どのような仕組みで養蚕文化を伝承していくことができるであろうか。筆者自身、養蚕団体の支援活動の一環としてさまざまな地域でワークショップなどのイベントを開催してきたが、そのなかで、三河の養蚕文化を知らなかった方々、また、イベントを通じて繭や絹糸の魅力に関心を持った方々にたくさん出会った。テレビで観たことはあっても、実際に見たり触ったりするのははじめてだという方も多い。こうした伝統文化に関しては、テレビもインターネットもともに、じつは発信力は大きくとも、行動変容をもたらすような影響力はあまり大きくないのではないかと考えている。なぜなら、インターネット情報はそこにアクセスしなければ、あるいは、その記事を読もうとしなければ、周知させることはできないからであり、また、そもそも「画面」の向こう側から伝えられる伝統継承という共同体の問題と課題は、共同体外部の人びとにとって行動変容をもたらすようなものとして受け取られにくいと考えるからである。広告のように広く周知させるよりも深く周知させることが重要な意味をもつ伝統継承に関しては、テレビでもインターネットでもなく、やはり「体験」が重要な意味をもつと考えている。

2 調査の背景と概要

筆者は2014（平成26）年から、勤務先の大学が位置する愛知県豊田市にある養蚕団体「いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）」を支援し広報する活動を学生とともにこなってきた。この団体は、明治時代から130年以上にも亘って続けられている伊勢神宮への献糸、および、平成と令和の天皇即位時に執りおこなわれた大嘗祭において繪服（にぎたえ）のための絹糸を献上する榮譽にも恵まれている。しかし、団体の、そして地域の高齢化が進み、後継者の不在という問題を抱えている。そこで、私どもは農作業のお手伝いや新商品の考案、イベントでのPRなど、団体の抱える問題の解決に向けて取り組んできた。

そんななか、「いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）」代表の金田氏から、「新城の海野さんのところには後継者がいるらしい」というお話をお聞きした。新聞やインターネットをたどったところ、新城市で養蚕の伝統を守り続けている海野氏のところには若手の女性が2名おり、かれらが海野氏から養蚕に関する指導を受けながらPRを含めたさまざまな活動をしている、という情報を入手した。そこで、どのようにしてこの“後継者”たちが養蚕を手伝うことになったのかをお聞きし、そこからヒントを得て稲武の後継者獲得につなげたい、と考えた。

大学での教育研究助成制度を利用し、「新城における養蚕後継者に関する調査研究——稲武での後継者獲得に向けて」と題して申請、助成を受けることができた³⁾。申請内容は以下のとおりである。

明治時代から続く豊田市稲武地区の養蚕は、現在、一般財団法人古橋会の財政支援を受けて「いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）」（代表：金田平重氏）が継承している。だが、金田代表をはじめ団体全体の高齢化が進み継続が困難になりつつある。本学部の「現代マネジメント実習」では、学生たちが稲武の養蚕についてイベントで周知させたり、メンバー募集チラシを作成・配布したりといったかたちで、本団体の後継者獲得に繋がるよう活動してきた。実習は今年で5年目となるが、本学部閉鎖前に、学部として大変お世話になってきた「いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）」のために、後継者獲得にもっと直接繋がる恩返しをしたいと考えてきた。

そこで、養蚕農家として後継者獲得に成功した新城市の事例をもとに、学生とともにその課題解決に取り組みたい。愛知県には2軒の養蚕農家があり、そのうちの1軒は「いなぶまゆっこ」で、もう1軒は新城市の「出沢やままゆ養蚕所」である。代表の海野久榮氏もご高齢であるものの、すでに2名の女性後継者がいる。彼女らは新城に移住し海野氏から養蚕を学んでいるが、後継者獲得までのプロセス、後継者となるまでの意思決定プロセス、現在の生活などについて、学生とともにインタビューする。稲武にも新城と同様の地理的・社会的特性があり、それらが後継者獲得を妨げていると考えられることから、新城調査をある種のケーススタディとし、その結果をもとに稲武の課題解決を図る。

なお、新城へは2回の訪問を予定している。全く初対面の方々であるため、1回目は趣旨や養蚕と本学との関わりなどについて挨拶程度に交わり、ラポールを形成する。2回目は本調査として、運営や生活の資金といった内容にまで踏み込むインタビューや可能な限りでの撮影をおこなう。そして、最終的には学生と連名で報告書を作成し、「いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）」および一般財団法人古橋会に報告する。

本助成の許可が下りたのが2019（令和元）年9月だったため、同年11月に下調べとして第1回調査を実施した。ところが、そこに後継者の女性たちはいなかった。かれらはそ

それぞれの事情で、養蚕を継承することができなくなっていたのだった。さらに追い打ちをかけたのは、新型コロナウイルス感染症の影響である。2020（令和2）年に入ってから長期休暇を利用して第2回調査を実施しようと考えていたのだが、不可能となってしまった。そして、質的調査教育としての成果だけでも公表しようと考え、2021（令和3）年の2月に、氏名や写真の掲載について確認していただくために報告書の草稿を海野氏にお送りした。すると後日、ご家族からお電話をいただき大変なショックを受けた。2020（令和2）年末に、海野氏が逝去されていたのである。調査協力者である学生たちと、第2回調査の準備と本稿の章立てがほぼ完了した矢先であった。

こうして、本調査研究は継続不可能となった。しかし、私どもが知り得た海野氏のご功績をたとえその一部でも伝承し、喫緊の課題である後継者問題を何らかのかたちで示すべきではないか、と考えるに至った。CiNii上で「(三河)赤引糸」、「お糸船」などのキーワードで論文検索をすると、古川・小川(1988)や鈴木(1997)などいずれも歴史学、民俗学、宗教学の観点から書かれた興味深い論考がヒットしたが、その伝統継承の問題を取り上げているものを見つけることはできなかった。そこで、海野氏らが守ってきた三河の養蚕文化とその継承問題について、曲がりなりにも“当事者”として考えたところを形に残しておきたい。

3 新城の風土と「赤引糸」「犬頭糸」

3.1 新城と「赤引糸」

東三河地区にある新城市は、東海道新幹線の豊橋駅からほど近い。2005（平成17）年に、旧新城市、南設楽郡鳳来町、作手村が合併し、現在の新城市となってからは、県内で豊田市に次いで二番目に大きな市となった。現在の人口は4万3,000人強で、高齢化率は32%を超えている。「長篠の戦」で有名な長篠も、新城市内に位置する。

市内には豊川（寒狭川）が流れており、上流付近では夏に、滝を越えようと飛躍する鮎を、竿の先に付けた網で捕える「笠網漁（かさあみりょう）」が江戸時代からおこなわれている。この名勝は「鮎滝」と呼ばれる。6月から9月の間に、新城市出沢地区の「出沢鮎滝保存会」の人びとが10日に1回の当番制で「笠網漁」をおこなう権利を有し、鮎のこの漁法は日本国内ではここ新城でしか見ることができない（図3）。春蚕の生育が5月いっぱいまでかかり、ちょうどその翌週から鮎滝が始まる、という季節感が地元の人びとにはある。



図3 「鮎滝」での海野氏
（出沢やままゆ養蚕所で展示されていた写真）⁴⁾

さて、三河における養蚕の歴史は古く、少なくとも平安時代には、三河国（参河国）で育てられる絹糸は「三河赤引糸」と呼ばれ、きわめて上質なものとして神や天皇に献上されてきたようである。また、応仁の乱によって一時的に養蚕が途絶えたことも多くの資料に記されている。

「赤引糸」という名前の意味は、「清浄な絹糸」だとしばしば説明される。だが、この説明ではなぜ「赤」なのか謎のままであり、そのことがずっと気になっていた。ところが、思わぬかたちでその意味を知ることができた。

2020（令和2）年7月、筆者が実習の授業の一環として学生を連れて、「豊田市近代の産業とくらし発見館」で開催されていた企画展「まゆまつり」を観に行った。「発見館」では、2010（平成22）年から毎年この企画展が実施されており、また講習会として市民を募って新城の出沢やままゆ養蚕所に行くバスツアーも開催されている。それらを企画・実施しているのが、学芸員の小西恭子氏である。

彼女が作成した企画展のパンフレットに、「赤引きの糸」について「赤く美しい色の糸をさすとも、また精練していない糸をさすともいわれています」と書かれていた。「赤い」は「明し」と同源であり、「輝くような色」という意味もあることから、生糸の美しい光沢を指したのではないかとのことである（小西 2020: 4-5 段落）。あわせて小西氏は、『愛知県蚕糸業史』（愛知県蚕糸業史編纂委員会、1964年刊）によると、「延喜式帳帳解」⁵⁾には、「赤引の糸は未だ練らざるものをいい、阿加羅比伎乃須々志乃伊登（あからひきのすすしのいと）と読む。須々志乃伊登とはすなわち未だ練らざるの斉服のことなり」と記されているという。「練る」とは、「絹を灰汁などで煮て柔らかくすること」、「須々志（すすし）」は「生絹（すすし）」のことであり、生糸の織物で練っていないものを指し、「伊勢神宮への神御衣も、大嘗祭の繪服も、精練していない生糸で織り上げられる特別な布地であることを説明している（小西 2020: 6-7 段落）。小西氏の説明は養蚕に関する幅広い知識に基づいており、なぜ「赤」なのかという説明に十分に答えてくれるものと思われる。

なお、愛知県蒲郡市にある「赤日子神社」には「三河養蠶祖神」が祀られており、御由緒には赤引糸との関連も記されている。

3.2 「犬頭糸」

三河の絹糸には、もう一つの呼び名がある。『今昔物語集』（馬淵ほか校注・訳 2001）巻第二十六に、「参河国犬頭糸語（みかはのくににいぬのかしらのいとをはじむること）第十一」という話が収録されている。話の概要は次の通りである。

[参河国犬頭糸語第十一 概要]

参河国の郡司が二人の妻に蚕を飼わせて糸をたくさん作らせていたが、本妻のところでは蚕がみんな死んでしまい（新しい妻の陰謀という噂もある）、夫は妻に冷淡になった。その妻の家は貧しくなってしまった。ある日のこと、本妻はたまたま一匹の蚕が桑の葉

にとまっていたため、この蚕を大事に飼い始めた。ところが、この家で飼っていた白犬が、突然この蚕を食べてしまった。

犬を責めるわけにもいかず打ちひしがれていると、犬がくしゃみをし、その鼻の穴から白い糸がそれぞれ出てきた。それを引くと、長々と糸が出てきたため巻き取った。四、五千両ほど巻き取り、糸の末端が繰り出されると、犬は死んでしまう。その糸は雪のように白く光沢がありすばらしいものだった。妻は、仏神が犬になって助けてくださったと思い、犬を桑の木の根元に埋めた。

そこに郡司（夫）が通りかかり、糸を見て驚く。新しい妻の家では、黒く節があつて粗悪な糸しか取れずにいたことから、郡司は再び本妻と暮らすようになった。犬を埋めた桑の木には蚕が隙間なく繭をつくり、素晴らしい糸ができた。

このことを郡司が国司に伝え、国司が朝廷に言上したところ、「犬頭（いぬのかしら）」という糸をこの国から献上することになった。この糸は、天皇の御召し物に織られることになっている。

ここでは三河（国）の絹糸が、「犬頭糸」と呼ばれ、そのすばらしさから天皇の御召し物とされるようになったことが示されている。また、この話に見いだされる、女性とそれに寄り添う動物が登場するという点、および、その動物が死ぬことで絹糸がもたらされるという点が、「オシラサマ」という養蚕の神に関する伝承と共通するという指摘もある（永藤 1998: 43）⁶⁾。平成と令和の大嘗祭の折に繪服（にぎたえ）のための繭を献上した稲武の伝統は、この「犬頭糸」にまで遡ることができるかもしれない。

「赤引糸」と「犬頭糸」の歴史と伝統は、今後、三河の養蚕を継承していくための重要な資源として位置づけられよう。いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）も出沢やままゆ養蚕所もともにこの「三河赤引糸」もしくは「犬頭糸」の伝統を守り続けており、伊勢神宮への献糸をおこなっている全国で三団体のうちの二団体ということになる。

3.3 お糸船神事

「三河赤引糸」の伊勢神宮への献糸は、伊勢神宮で天照大御神が着用する「神御衣（かむみそ）」の一つである「和妙（にぎたえ）」の原料となる絹糸を奉納する行事である。この祭りは、約 1300 年前から始まると言われている⁷⁾。だが、応仁の乱（1467 年）の後、戦国の世となり、戦乱の影響を受け一時中断された（古川・小川 1988: 32）。しかし、明治期に入ってこの伝統を復活させたのが、西三河の古橋源六郎暉兒（てるのり）と東三河の渡邊熊十である。古橋源六郎暉兒は現在の稲武の地で 1882（明治 15）年に、渡邊熊十は現在の愛知県田原市の地で 1901（明治 34）年に、それぞれ復活させた。つまり、稲武の養蚕も新城の養蚕も一時は途絶え、ともに地元の盟主によってその歴史が明治期に再発見され、復活されたのである。

渡邊熊十は、当時、伊勢神宮では私幣禁断の理由で受納できないと容易に受け入れても

らえなかったが、神宮司庁、愛知県庁、内務省と交渉に駆け回ったのだという（古川・小川 1988: 32）。そして、約 10 年かけてようやく受け入れてもらえることとなり、神宮から神官が派遣されて神殿が建設され、現在の愛知県田原市に神宮神御衣御料所（じんぐうかんみそごりょうしょ）（通称「お糸神社」）が設けられた（図 1）。神宮神御衣御料所は渥美半島の先端部に位置していることから、かつては漁船を借り三重県（伊勢神宮）に渡ったが、現在はそれが伊勢湾フェリーに代わっている。船で三重県に渡り伊勢神宮へ絹糸を奉納するところから、この儀式は「お糸船神事」と呼ばれており、現在まで年 1 回（7 月 3 日～4 日）おこなわれている。農協は、田原までのバスを手配するというかたちでお糸船神事の支援をしている。

当初は東三河一帯の養蚕農家が一握りずつ生繭を提供し、それらを合わせて奉納していたという。新城にも 40～50 軒ほどの養蚕農家があり、奉納に参加していた。新城の海野氏が繭を提供し始めたのは、海野氏が養蚕を始めて数年後からである。10 年ほど前に、海野氏が地域の養蚕担当責任者のようなかたちになったそうである。

現在では、出沢やままゆ養蚕所だけが奉納する絹糸（繭）を提供する任務を負っている。海野氏が献上する繭は、10～15kg もの量になる。お糸船の方は、渡邊熊十氏のご親族である渡邊久子氏がその伝統を継承している（図 4）。出沢やままゆ養蚕所から



図 4 献糸の際に参列者に渡されるというカード。毎年デザインが異なるという（出沢やままゆ養蚕所で展示されていたもの）。

神宮神御衣御料所までは車で約 2 時間弱の距離だが、これほどまでに遠いところからの奉納を必要とするようになった背景には、御料所周辺の養蚕農家の消滅という事態があった。御料所から謝礼のようなかたちでお金が支払われており、それだけで養蚕の方は運営できているそうである。

海野氏が奉納に参列するようになったのは 1973（昭和 48）年前後からである。現在の献糸には、生産者である海野氏をはじめ、海野氏の息子さんや農協の組合員らも参加している。また、宿泊費等を支払えば、一般の希望者も参加できるようなのである⁸⁾。儀式は 11 時くらいから始まり 1 時間ほどで終わり、その後、懇親会が執りおこなわれる。海野氏は玉串料として 5,000 円を包むという。

伊勢への献糸のおよそ 1 週間前の 6 月下旬には、神宮神御衣御料所において、糸姫と呼ばれる女性二人が「赤引糸」を座繰機で紡ぐ、「繰糸始め」という儀式もおこなわれる。現在の糸姫は、渡辺氏のお知り合いの方々がおこなっているが、彼女らも 60 歳前後と高齢である。これに使用する糸も海野さんが育てた蚕の繭である。

海野氏自身は、基本的にはこのお糸船神事のために養蚕をおこなってきている。異なる共同体のそれぞれの歴史と伝統が、互いを支えており、どちらかが失われてしまえばともに失われかねない。調査当時、海野氏は95歳、御料所の渡邊氏は92歳と、ともに高齢であり、どちらの後継問題も喫緊の課題である。

4 出沢やままゆ養蚕所と海野久榮氏

「出沢やままゆ養蚕所」は、愛知県東部の東三河地方に位置する新城市の風光明媚な山奥に位置する(図5)。海野氏はここで、17歳だった1941(昭和16)年より養蚕をおこなっている。海野氏の父親が高等学校の教員をしており、集落ではおこなっていませんでしたが、学校で養蚕をおこなっていたそうである。海



図5 出沢やままゆ養蚕所の外観と周辺環境

野氏はこの父から養蚕の技能を受け継いだ。戦時中は一時的に兵役で新城からも養蚕からも離れたが、戦後、新城に帰郷し、家も養蚕所も空襲の被害を受けていなかったためすぐに養蚕を再開することができた。その後も、ここから離れた地で仕事をしながらも、年に5回ほど帰ってきては養蚕をおこなっていたという。

養蚕所の内部では、春蚕(5月)と秋蚕(8月下旬)を飼育している。伊勢神宮に奉納する繭は、「錦秋(キンシュウ)」と「鍾和(ショウワ)」を交配させた春蚕である。5月初旬に飼育が始まり、月末には繭ができる。稲武では、掃立から数日間は成長が揃うようにするため人工飼料を与える(堀田 2015)が、海野氏は、掃立の段階から、蚕に人口飼料ではなく桑の葉の新芽を包丁で細かく切って与えている。種(蚕の卵)は、長野県にある上田蚕種から購入しているが、費用は御料所(田原市)の渡邊氏が負担している。そして、6月初旬に、生繭(蚕が生きたまま中に入っている繭)の状態ですべての袋に入れ、群馬県の工場へ配送する。養蚕農家が多かった時は、組合としてトラックを1台使って送り届けていたが、現在は海野氏が送る「段ボール2箱」のみである。6月下旬には絹糸となって工場から戻ってくる。この絹糸は、先述のように、7月初旬にお糸船で伊勢神宮へと献上される。

十年ほど前までは、春蚕のみを飼育していたが、三年ほど前から、上皇后が紅葉山御養蚕所で育てられていることで知られる「小石丸」を、秋蚕として育て始めたという。「小石丸」は日本古来の品種で、細い糸を吐き繭(粒)も小さめの品種である。新城の外部から手伝いに来ている方と飼育し、その方がすべて買い取るという。

養蚕所の名前にもある「山繭」とは、ヤマユガ科の蛾の繭のことで、一般的に知られ

ているカイコガ科の繭よりも生命力が強い蛾の繭である。ヤマムユガ科の蚕は、養蚕所から少し離れたところにあるネットで覆われたハウス内に植えられた桑の木を巣にして、ほぼ自然に近いかたちで飼育される(図6)。調査当時は、静岡県浜松で機織りをしている方がここを借りているとのことであった。カイコガ科の幼虫と繭は白色をしているが、ヤマムユガ科の幼虫と繭は薄緑色をしており、伊勢神宮に奉納するものとは異なる。ヤマムユガ科の蚕は、桑の葉が濡れてしまっても大きな問題はなく、雨風(台風すら)気にせず育てることができるという。カイコガ科の蚕とは異なり、自力で餌を探すこともでき、桑の葉以外にも柏やヤマモモの葉なども食べるが、スギの葉は食べない。現在、愛知県内で山繭を飼育しているのはここだけだという。



図6 山繭を飼育するハウス

出沢では、戦前から養蚕がおこなわれており、養蚕所に保管されていた資料のなかには1932(昭和7)年の「出沢飼育所」の写真があった。当時は養蚕農家が多く、託児所等でも養蚕の手伝いをしていたという。また、この地域には、安定して蚕が取れるようにと、“おこしさま”⁹⁾を祭る祭事もあった。

平成初期頃までは、伊勢神宮への献糸や繰糸始めに使う絹糸だけでなく、農林水産省と愛知県蚕糸業振興会が共催していた、繭の質や目方を競う繭生産性向上コンクールにも糸を出品し、海野氏は優秀な成績をおさめていた。出沢やままゆ養蚕所には、当時の表彰状が何枚も残されており、質の高い繭が作られてきたことがうかがえた。しかし、かつては40~50軒あった養蚕農家も平成10年頃には激減する。それに伴い、農林水産省の蚕糸課が閉鎖され、コンクール自体も無くなってしまった。

出沢やままゆ養蚕所は、約10年前から、新城市の「まちなか博物館」に指定されていた。「まちなか博物館」とは新城に残る伝統を継承していこうという目的で、仕事場や生活の場をそのままそのまま博物館として公開・展示するものである。養蚕所内には、海野氏が工場からもらい



図7 繭検定用自動繰糸機(煮上がった繭をこの機械に移し糸を繰り取る工程で、解除率(糸のほぐれ具合)と生糸量歩合(生糸の量)を検定する機械)

うけた繭検定用の機械や水分検査機、人工飼料のサンプルなどが所狭しと置かれており、それぞれについて海野氏は使い方などを詳しく説明してくださった(図7, 図8)。本事業の一環として、豊田市近代の産業とくらし発見館や豊鉄バス主催のバスツアーの受け入れもおこなっていた。帳簿を拝見したところ、東京からの見学者も複数いて驚かされた。2021(令和3)年現在は、「まちなか博物館」として彫金や竹細工の工房など10か所が指定されているが、出沢やままゆ養蚕所はすでに掲載されていない。

海野氏に、やめたいと思ったことはありますかとお聞きしたところ、海野氏はしきりに「組合だもんで、うちばっかじゃないもんで」、「大勢の中で手伝うっていうのがあるが、(それぞれの仕事を)専門にやってくれる人がおって、繭を大切にちゃんとやってくれるもんでちょっと(も)世話はなかった」と、組合と手助けしてくれる人びとの存在を話されていた。こうした発言からは、周囲の人びとの協力とそれに対して応えようとしてきた海野氏の使命感のようなものを感じとれる。



図8 棚後ろ左の機械：生糸水分検査機(検査用の糸を140°Cの熱風で乾燥して5分毎に計量し、連続2回の計量値の差がなくなった時を無水量として正量を算定する機械)、棚上のビン：人工飼料のサンプル

5 後継者問題

ここでは、2名の後継候補者たちがどのようにして出沢やままゆ養蚕所に来たのか、またなぜ辞めたのかをみていく。なお、ここで紹介する女性2名の経歴等は、一部変更してある。その理由は、私たちは当人たちに直接お会いすることができなかったため間接的なデータであること、また、経歴はプライバシーに関わる内容が含まれるが掲載許可を取っていないこと、そして、多少の脚色や改変があっても、本稿で示したい内容と照らし合わせると問題がないと判断されうることである¹⁰⁾。

Aさんは愛知県出身で、趣味の一つとして絹糸を用いた機織りをおこなっており、機織りの教室も開いていた。絹糸の原材料であるお蚕の飼育から糸取り、糸の染色まで、すべて自分でやってみたいと思いたち、海野氏のもとを訪れた。外部からの最初の後継候補者であった。そしてすぐに新城市内に空き家と畑を借り、養蚕のシーズンである春と秋には海野氏から仕事を教わりながら手伝った。蚕の餌となる桑の木の手入れも熱心におこなっていた。また、さまざまな場所で糸引き体験などのイベントを企画・実施し、養蚕の周知活動にも従事した。その仕事ぶりはけっして一過性のものではなく、かなり意欲的だったようである。

ところが、10年目の2019（平成31）年の春に、実家の事情で突然養蚕から離れることとなった。Aさんには継続する気持ちはあったものの、それ以上に関与しなければならぬことができなくなってしまったようである。

もうひとりのBさんも愛知県出身である。大学の農学部を卒業後、NPO職員として働いていたが、NPOの農業ツアーとして出沢やままゆ養蚕所を訪れたことをきっかけに、海野氏を手伝い始めることとなった。その時すでに海野氏を手伝っていたAさんと二人で、桑の木を運ぶなどの力仕事から糸取りのイベントなど、さまざまなかたちで積極的に取り組んできた。

しかし、Aさんと同じく2019（平成31）年の春に、Bさんはかねてから希望していた教員（非常勤）の道が開けたことで、養蚕から離れてしまった。したがって、二人が養蚕所を離れることになった時期はほぼ同じであるが、理由は異なるようである。

こうして突如、後継候補者はいなくなってしまう、2019（平成31）年度の春蚕は、地元のボランティアの方々の協力の下で飼育した。それから半年が経っていた調査時点では、Bさんは非常勤講師を辞して、農家の友人とともに養蚕所を後継することを視野に入れているそうである。養蚕所に来た時、Bさんは30歳前後であり、それからおよそ10年が経つため、40歳前後（調査当時）ということになるだろう。Bさんの後継について、海野氏は「なんとも言えやへんけどね。だもんで今度はBちゃんの方は今度はまあコツコツ、何とか結婚してもらおうなり、ははは」と話されていた。養蚕の後継を強く望むことはせず、むしろBさん個人の幸せを望みつつ、また手伝ってくれればという淡い期待がうかがえる発言をされていた。

彼女らに代わって、継承が期待されているのは海野氏の息子さんである。彼は十年来、お糸船の付き添いも務めてきており、養蚕所の正式な後継者である。調査当時は、団体職員の仕事があるため養蚕に直接的に携わってはならず養蚕自体は未経験とのことだったが、調査当時、すでに父久榮氏に代わって農作業をするというかたちで間接的にはあるが養蚕に関わり始めており、定年退職後に後継が期待されている。それまでの間は、地元の高齢男性のボランティアの方々が海野氏を手伝っている。海野氏が逝去された後も、かれらが海野氏の遺志を引き継いでいるというお話も、2021（令和3）年の春に、海野氏の息子さんの妻からお聞きすることができた。

後継者が一時的にできたもののやむを得ない事情で辞められたという経験をしたことで、海野氏の周囲では、外部からの後継者に対してはやや諦めの雰囲気漂っているように感じられた。と同時に、息子さんが後継してくれるだろうという期待もうかがえた。息子さんと同様に、海野氏を長年手伝ってみえたボランティアの方々も使命感を覚えているであろう。しかし、かれらもまた高齢である。

「人生100年時代」などと言われる昨今、定年退職後の人生は長い。養蚕を含む農業は、退職後の趣味や地域貢献活動の一つとなりつつあるように思う。それを担うのは、伝統を共有する共同体内部の人びとが中心でありつつも、高齢化が進む地域においては、たとえ

ば桑畑の整備などの肉体労働は外部からの若手ボランティアの協力を得る、といった工夫が必要であるように思われる。それとともに重要なことは、外部の人びとが、共同体の側がどのような受容可能性を有しているかに関して理解すること、言い換えれば、共同体の側が示すであろう「受け手性 (recipiency)」について理解することである。

“田舎は閉鎖的だ” などとしばしば言われる。しかし、それは“田舎” と呼ばれる地域ほど共同体意識が強く、自分たちの共有財産としての地域生活や伝統を外部の人びとに脅かされるリスクを予期するからである。なぜ、何をしにここに来るのが明確でない場合、私たちは脅威を感じる。そうした共同体の「受け手性」を、外部の人びとは理解しておくことが重要であり、その理解のうえで協働する可能性を模索しなければならないのである。

6 おわりに

新城の海野久榮氏へのききとり調査からは、新城における「三河赤引糸」と田原における「お糸船」という二つの伝統は不可分な関係性にあり、ともに従事者の高齢化とそれに伴う後継者問題を抱えていることが明らかになった。

新城にせよ稲武にせよ、養蚕は営利目的ではなく、歴史と伝統の維持という非営利目的でおこなわれている。いなぶまゆっこ (まゆっこクラブ) の金田平重氏は、かつて筆者のインタビューに対し「お蚕さんでお金儲けをしようと考えてはいない」と話してくださったが、海野氏から同じメッセージを直接お聞きしたわけではないものの、彼もまた同じ精神を共有していることがたった一日だけの調査ではあったがうかがえた。

養蚕に限らず、伝統継承者には個人としての経済的成功ではなく、共同体の歴史を受け継ぐという道徳的態度が求められる。なぜなら、伝統は共同体の財産だからである。伝統を共有する共同体内部にいる個人の場合、その伝統を継承する動機はおそらく使命感や愛好というかたちで表わされ、それらに裏づけられた道徳的態度が期待されることになる。共同体外部の個人の場合は、使命感という動機は表わされえないものの、対象に関する知識や経験を有するという条件の下で、愛好という動機は表わされえるようになるであろう。

実際に、海野氏や渡邊氏、また海野氏の息子さんやボランティアの方々は、共同体内部の個人として、(愛好もあろうが) 使命感という動機で、後継候補者だった女性2名は、共同体外部の個人ではあるものの、それぞれ機織りの経験と農学部で得た知識に基づく愛好という動機で、伝統継承に携わり始めた、と説明される。とくにBさんの方は、養蚕からいったん離れたものの、おそらく長年海野氏をお手伝いしてきた経験があることから使命感に駆られ——もちろん現在の勤務形態も関わるであろうが——再び養蚕に携わることを表明していると説明しうる点では、すでに共同体内部の個人として位置づけることも可能かもしれない。

Bさんらの動機を筆者がこのように語ることは奇妙に思われるかもしれない。しかし、動機とは状況を説明する語彙である。C.W.ミルズの「動機の語彙 (vocabularies of motive)」論は、行為をもたらす動機は複数存在するが、私たちはそれを他者に説明する際、あるいは

は他者の行為を説明する際、そのなかから状況に適切と思われるものを選ぶという点で、動機はまさしく「語彙 (vocabularies)」と同じような性質をもつ、ということを示すものである。その意味で、使命感や知識と経験に基づく愛好というのは、道徳的行為というフレーム内で適切な動機である。そして、適切な動機が浮かばない時に、私たちは困惑しつつも動機を“考案”し、場合によっては「私利私欲」などと解することも生じうるであろう。仮に、共同体外部の個人が、共同体の歴史と伝統を守る「使命感」という動機を口にすれば、人びとはそれを“本当の動機”とはとらえられない。なぜなら、その個人は「使命感」を覚えるような状況にないからである。つまり、動機は、自己だけでなく他者に認められてこそ動機であると言えるのである。

だが、人が何かに興味関心をもつきっかけというのは元来個人的なものである。共同体内部にいる人びと全員が使命感をもつわけではないし、何らかの行為をするに至る動機はさまざまである。とはいえ、共同体の共有財産としての伝統を守る行為に関しては、もっぱら個人的な動機ではなく、その動機が共同体のメンバーから見て適切なものである必要がある。しかし、私たちは他者の動機という内面的な動きを知ることができず、もっぱらその行為とそれを取り巻く状況からしか考えることができない。共同体のメンバーから協力を得る必要がある場合は、この点の重要性はますます高まる。

ひるがえって、後継者を求めていくうえで重要なのは、動機を語りうるフレーム内に他者を巻き込むことであるように思われる。とりわけ共同体外部の他者は、知識や経験が無ければ動機を語りえないため、かれらがアクセスしやすくするために「体験」機会を設ける必要がある。たとえば、筆者がおこなってきたように、教育活動の一環として学生や教員が「体験のメディア」となり関与するというのは、“価値中立的”な立場から、また、参加者（学生）が単位という外的報酬を得るように紐づけられていることから、共同体の共有財産を脅かすリスクもきわめて小さいと言えよう。

また、その際に、「三河赤引糸」をめぐる大きな歴史的物語のなかでそれぞれの活動を位置づけることも重要だと考えている。「三河赤引糸」の伝統を守ってきた稲武および新城と田原は、「伊勢神宮」というキーワードで結びつき、稲武と新城には「三河赤引糸」の生産という共通点があるが、新城と田原には「お糸船」の伝統という共通点がある。これら「三河赤引糸」をめぐる物語のなかで、個々の団体の位置づけを示すことがより理解を深めるのではないだろうか。たとえば、図2の『中日新聞』の記事は、2つの団体を同じテーマで扱うことで、むしろ各団体の固有性をよりいっそう強く表わすものとなっているように思う。現在、それぞれの団体は行政区画が異なり、支援者も異なることから、それぞれが独立して活動しているような印象を与えているが、ある種の協働が必要なのではないかと思われる。場合によっては、「三河赤引糸」の素晴らしさを知ってもらうために、他地域の絹糸とどのように異なるのかの説明も有効であろう。

そして、これらの課題はできるだけ早く解決されなければならない。出沢やままゆ養蚕所には、養蚕の様子がよく分かる機械や道具、飼料や繭のサンプルなどの貴重な資料が収

蔵されている。一般公開されていたことで、県内外から来訪者が多く訪れ、「体験」する機会があった。そうした機会の復活と資料の保全も喫緊の課題であろう。

謝辞

本調査は、「2019年度愛知学泉大学学内 GP (Good Practice) 助成」を受けておこなわれました。本調査にご協力いただきました皆様に、心より御礼申し上げます。海野久榮氏の偉業、そして、出沢やままゆ養蚕所の歴史を後世に伝え、その伝統文化の継承することに、微力ながら貢献できればと思います。

[注]

- 1) 愛知県「愛知の住みやすさ発信サイト」掲載の地図に、いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）、出沢やままゆ養蚕所、神宮神衣御料所の位置を筆者が加筆した。
- 2) この記事は、中日新聞社の許諾を得て転載している。
- 3) この助成制度による、社会調査に関する教育上の工夫とその成果については堀田(2021)をご参照いただきたい。
- 4) 図3以降の図(写真)はすべて筆者らが撮影したものであり、調査の段階で海野氏から掲載の許諾を得ている。
- 5) 延喜式帳とは、延喜年(905年～923年)の間に編纂された、養老律令の法令がまとめられたものである。
- 6) 網野は、ここで取り上げた『今昔物語集』のほか、同じく平安時代の『日本国現報善悪霊異記(日本霊異記)』や『伊勢物語』などにおける記述、また、その前後の歴史資料にも、女性が養蚕をおこない、生糸の販売などもおこなっていたことを指摘し、前近代の女性の社会的地位を再検討する必要性を論じている。
- 7) 古川・小川(1988)には、史実として最初に明記されるようになったのは、文武天皇の時代にまでさかのぼることができる、と記されている(古川・小川 1988:32)。また、小西恭子氏の「日誌」には、朝廷に奉納された絹糸は「犬頭糸」と呼ばれ天武天皇の時代にまでさかのぼると記されている(小西 2014)。
- 8) 渥美半島観光ビューロー(2019)を参照したところ、令和2年度のお糸船神事には、1泊3食付、フェリー代込みで、1人16,000円で参加できる、とある(定員200名)。また、正式参拝の際は正装をするよう注意書きが記されている。
- 9) 海野氏は、かつて「安定してお蚕が取れるように」と近所の人びとが5、6人集まっておこなっていた儀式のことを「おこしさま」と話されていた。蚕を表わす語彙を調査した新井(2017)によると、蚕の神のことは「おかいこさま」や「おこさま」と呼ぶ地方があり、とくに東日本では多様な語彙があるようだが、「おこしさま」は掲載されていない。この地域独自の言い方なのかもしれないが、詳細は不明である。
- 10) 玉野和志は、社会構造を描くという目的に照らせば、直接的なデータがなく具体的な

やり取りも分からない部分に関しては、イメージを持ってもらうために「作り話」を書いたり、また、個人が特定できないようにある種の改ざんをしたりすることも、場合によってはやむを得ない、と述べている（玉野・石井・池口・堀田 2021）。

[文献]

- 網野善彦, 1997, 「日本中世の桑と養蚕」『神奈川大学日本常民文化研究所論集』14: 7-29.
- 新井小夜子, 2017, 「〈蚕〉を表す語彙——造語法と方言分布」『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会）19(4): 23-42.
- 古川智恵子・小川由香, 1988, 「浜のくらしと祭り（第1報）——繰糸祭・お糸船神事より」『名古屋女子大学紀要』34: 31-40.
- 堀田裕子, 2015, 「『いなぶまゆっこ』の活動紹介——地域ブランドをどう生かすか」『愛知学泉大学現代マネジメント学部紀要』3(2): 107-14.
- 堀田裕子, 2021, 「主体的学びを促す教育実践例——2019年度愛知学泉大学学内 GP 研究実施概要報告」『愛知学泉大学紀要』3(2): 117-28.
- 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注・訳, 2001, 『今昔物語集』3, 小学館.
- Mills, C W, [1940]1963, “Situating Actions and Vocabularies of Motive,” I L Horowitz ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford, London & New York: Oxford University Press, 439-68. (田中義久訳, 1971, 「状況化された行為と動機の語彙」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房, 344-55.)
- 永藤美緒, 1998, 「『今昔物語』に登場する犬」『日本文学誌要』57: 42-53.
- 鈴木鋭彦, 1997, 「伊勢神宮への神衣奉納——三河国と遠江国」『愛知学院大学文学部紀要』27: 358-49.
- 玉野和志・石井由香理・池口佳子・堀田裕子, 2021, 「パイオニアに聞く（第13回）」『質的心理学フォーラム』49-58.

[新聞]

- 「伝統を引き継いで」, 『東日新聞』, 2019年9月10日, p.3.
- 「伊勢献糸継ぐ養蚕家」, 『中日新聞（豊田版）』, 2016年8月28日, p.22.
- 「蚕に人生をかけて」, 『朝日新聞（三河版）』, 2003年4月20日, p.28.

[参照 URL]

- 愛知県, n.d., 「愛知の住みやすさ発信サイト」, (2021年10月1日取得, <https://www.pref.aichi.jp/chiho-sosei/sumiyasusa/cities/index.html>).
- 渥美半島観光ビューロー, 2019, 「お糸船 お糸奉納と伊勢神宮参拝のお知らせ」, News, 2019年6月13日, (2021年10月1日取得, <https://www.taharakankou.gr.jp/news/000322.html>).

新城市，2021，「新城まちなか博物館とは」，（2021年10月1日取得，
<https://www.city.shinshiro.lg.jp/kanko/machinaka-museum/hakubutsukantoha.html>）。

小西恭子（豊田市近代の産業とくらし発見館），2020，「まゆまつり2020④「赤引の糸」と
はどういう意味ですか？」，発見館日誌パート2，2020年7月3日，（2021年10月1
日取得，https://toyota-hakken01.at.webry.info/202007/article_1.html）。

【編集後記】『現象と秩序』第15号をお届けします。今回もまた、社会学、民俗学、言語学といったさまざまな分野からご投稿いただきました。

第1論文は、子育て中の大学教員のワーク・ライフ・バランスに関する論考です。聞き取り調査からその実態が明らかにされており、(子育て中の身にとっては)ロールモデルとして興味深く、また、研究活動をどう位置づけるべきかという著者の問いも考えさせられます。

第2論文は、通訳者が相互行為のなかで行なう介入行為とその意義について、会話分析から明らかにしています。在日外国人が助産師外来を受診する場面における通訳者の巧みな介入行為が、参加者の相互行為と課題を達成するダイナミズムが見えてきます。

第3論文は、愛知県三河地区の「赤引糸」および「お糸船」の伝統を支えてきた人びとの軌跡を記録したものです。また、高齢化が進み存続の危機に瀕する共同体の伝統を、どのようにして維持していくかという問題にも切り込んでいます。

第4論文は、節分に豆まきをしないという習俗をもつ地域のフィールドワークの成果です。その習俗の単位(家単位、地域単位等)や赤鬼法性院伝説との関連、そして単位と伝説との関連性についてなど詳細に考察されている、粘り強い調査研究の賜物だと思われます。

第5論文は、普通体の会話の中で丁寧体が出現する「アップシフト」という現象を、漫才のデータを元に考察しています。日常生活のなかで見出せる素材のおもしろさもさることながら、その分析の鋭敏さも読みごたえがあります。

第6論文は、今年開催された「東京2020オリパラ競技大会」における参加資格問題について、人権社会学の見地から考察しています。この問題を「パスする日常」の妨害という観点で切り込み、今年の「オリパラ」が、むしろインクルージョンの徹底に向けての諸工夫を無視した時代逆行的存在であった可能性を示唆しています。

ぜひご堪能ください。(H.Y.)

『現象と秩序』編集委員会(2021年度)

編集委員会委員長：堀田裕子(愛知学泉大学)

編集委員：檜田美雄(神戸市看護大学)、中塚朋子(就実大学)

編集幹事：川上陵哉(神戸市外国語大学)

編集協力・印刷協力：村中淑子(桃山学院大学)

『現象と秩序』第15号 2021年10月31日発行

発行所 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 檜田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074 (檜田研), e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>